

発掘調査報告第37集

農村総合整備モデル事業殿村北線
道路改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

きつね く ぼ

狐久保遺跡

(第3次発掘調査)

1997. 3

駒ヶ根市
駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第37集

農村総合整備モデル事業殿村北線
道路改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

きつね く ほ
狐久保遺跡
(第3次発掘調査)

1997.3

駒ヶ根市
駒ヶ根市教育委員会

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根市東伊那に所在する狐久保遺跡第3次発掘調査の報告書であります。

狐久保遺跡は天竜川河岸段丘上にあり、赤石山脈とその前山である伊那山地を背にし、眼下に天竜川を臨み、対岸に遠くそびえる木曾山脈の峰々を一望することができる場所にある、弥生時代後期の集落跡であります。

市内東伊那地区にある山田遺跡・狐久保遺跡・丸山遺跡・殿村遺跡は、かつて総称して「伊那村遺跡」と呼ばれ、昭和25年から26年にかけて発掘調査が行われ、当地方でも最も早い時期に学術調査がなされた記念すべき遺跡でもあります。

現在の東伊那は合併して駒ヶ根市となる前の伊那村で、当時の村が文化財保存会を組織してこの調査の運営にあたり、國學院大学の大場磐雄先生を調査委員長にお願いし、東京大学からは藤島玄治郎先生、県内では市村成人先生、一志茂樹先生、宮坂英弐先生を指導者としてお迎えし、地元の諸団体の協力のもと村をあげての調査が行われました。この時に狐久保遺跡では4軒の住居址が発掘されております。

次の狐久保遺跡第2次調査は市立東中学校の造成工事に伴うもので、昭和38年に友野良一先生等によって緊急発掘調査が行われ、この時は6軒の住居址と竪穴址1基が確認されております。

また昭和40年には、第1次調査で発掘された住居址のうちロ号住居址が、藤島先生の設計を基にして東中学校グラウンド北側に場所を移して復元され、地元の人達にも親しまれるとともに、学校教育にも寄与して参りました。

そして今回の調査が第3次調査となるわけでございますが、第1次・第2次と調査に携わって来られた友野先生に調査団長をお願いして調査しましたところ、狭い範囲ながら新たに2軒の住居址が発見されました。これまでに確認された10軒の住居址とともに、当弥生時代集落のあり方を探る上で貴重な資料であり、今後の研究上重要な役割を果たすものと考えております。

最後になりましたが、発掘調査を行うにあたり深いご理解をいただいた地権者、工事関係者はじめ、調査に従事いただいた調査団の皆様等、多くの方々のご協力、ご厚志により無事所期の目的を果たすことができました。ここに関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域研究の一助とならんことを念願する次第であります。

平成 9 年 2 月

駒ヶ根市教育長 高坂 保

例 言

1. この報告書は、農村総合整備モデル事業(取村北線)に伴う狐久保遺跡第3次発掘調査の報告で駒ヶ根市の委託を受けて、駒ヶ根市教育委員会が組織する駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施したものである。
2. 本報告書は本文及び挿図の後に写真図版をまとめて編集し、報告書抄録は最後に掲載してある。
3. 遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は北澤武志があたった。
4. 本報告の執筆・編集は北澤が行い、友野が監修した。
5. 遺物及び実測図等の調査に伴う関係資料は、駒ヶ根市立博物館(長野県駒ヶ根市上穂栄町23番1号)に保管してある。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
図 版 目 次	

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 発掘調査の組織	1
1. 胸ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会	1
2. 狐久保遺跡発掘調査団	1
第3節 発掘調査経過	2
第II章 遺跡の環境	3
第1節 位置及び地形・地質	3
1. 位 置	3
2. 地 形	3
3. 地 質	3
第2節 歴史的環境	6
1. 周辺の遺跡	6
2. 狐久保遺跡第1・2次調査について	8
第III章 発掘調査	14
第1節 発掘調査の概要	14
第2節 遺構及び遺物	15
1. 第8号住居址	15
2. 第9号住居址	16
第IV章 考 察	17
狐久保遺跡住居址・竪穴址一覧表	23

報告書抄録

図 版 目 次

1. 挿図目次

第1図	狐久保遺跡位置図	4
第2図	狐久保遺跡周辺地形図	5
第3図	狐久保遺跡周辺遺跡分布図	7
第4図	狐久保遺跡第1次調査住居址位置図	9
第5図	狐久保遺跡第2次調査住居址位置図	9
第6図	狐久保遺跡第1・2次調査住居址実測図	10
第7図	狐久保遺跡第1・2次調査出土遺物	11
第8図	狐久保遺跡第3次調査遺構位置図	12
第9図	狐久保遺跡住居址分布図	13
第10図	第8号住居址実測図	19
第11図	第9号住居址実測図	20
第12図	第8号住居址出土遺物実測図・拓影	21
第13図	第8号・第9号住居址出土遺物実測図・拓影	22

2. 写真目次

写真1	1.遺跡遠景 2.第8・9号住居址 3.調査前状況 4.ロ号址復元住居
写真2	第8号住居址 1.全体 2・3.床固い箇所
写真3	” 1.埋甕炉 2・3.主柱穴 4.埋甕炉
写真4	第9号住居址 1.全体 2・3.主柱穴埋土 4・5.壁際小ピット
写真5	” 1~3.壁際小ピット列 4・5.遺物出土状況
写真6	第8号住居址出土土器
写真7	第8・9号住居址出土遺物
写真8	第8・9号住居址出土石器

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

農村総合モデル事業殿村北線の道路工事が狐久保遺跡内で行われることになり、平成7年8月13日に市教育委員会と市農林課の間で事前保護協議が行われた。

この協議により、平成7年9月22日道路南側の未舗装となっていた道路拡幅予定地に幅1.5m長さ75mのトレンチを入れて試掘を行ったところ住居址と思われる箇所を発見した。

試掘結果にもとづき再度協議を行い、現道路は装下も含めて発掘調査を実施し記録保存をすることとなった。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、調査会は団長には友野良一氏をお願いして狐久保遺跡発掘調査団を組織し、平成8年9月10日から現場調査を開始した。

第 2 節 発掘調査の組織

1. 駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧問 吉江 修 深 (駒ヶ根市教育委員長)

会 長 高 坂 保 (駒ヶ根市教育長)

理事 友野 良一 (市文化財審議会会長)

” 竹村 進 (市文化財審議会委員)

” 田中 清文 (”)

” 気賀澤 進 (駒ヶ根市立博物館長)

監事 赤須 弘 甫 (駒ヶ根市収入役)

幹事 市村 重 実 (市生涯学習課長)

” 唐沢 裕 二 (市教委生涯学習係)

” 湯澤 啓 子 (市立博物館職員)

理事 林 勉 (市文化財審議会副会長)

” 新井 徳 博 (市文化財審議会委員)

” 川端 清 司 (駒ヶ根市教育次長)

監事 宮脇 昌 三 (駒ヶ根郷土研究会会長)

幹事 倉田 俊 之 (市教委生涯学習係)

” 北澤 武 志 (市立博物館職員)

2. 狐久保遺跡発掘調査団

調査団長 友野 良一 (日本考古学協会会員) 発掘担当者

調査副団長 気賀澤 進 (日本考古学協会会員) ”

調査員 北澤 武志 (長野県考古学協会会員)

作業協力員 赤羽 慶三郎、羽生 正吉、林 吉十、竹村 章子

第3節 発掘調査経過

- 9月9日(月) 器材搬入。
- 9月10日(火) 工事重機により表土・ほ装を除く。2箇所で住居と思われる落ち込みを確認し、周辺のジョレンがけを行う。テント設置。
- 9月11日(水) 調査区内をジョレンがけにより掘り下げる。道路中央付近は水道管埋設により攪乱を受けている。遺構は南寄りにかかっているため、北側にロープを張り歩行者通路を確保する。本日調査開始式を行う。
- 9月12日(木) 住居外の落ち込みを確認する作業をし、西側の8号住から内部調査を開始。遺物は覆土内に均一に散見する。殿村四等三角点より調査用ベンチマークを設定。
- 9月13日(金) 8号住内部調査。途中より雨で、土のうで流れ込み防止。
- 9月18日(水) 8号住を床まで掘り下げる。北壁上部は水道管工事で破壊されている。覆土上層より土製紡錘車片出土。ほかに弥生後期甕片ほぼ1個体分出土。
- 9月19日(木) 8号住床面調査。主柱穴2とその間に埋篋炉を検出。床面は部分的に固い部分がある。
- 9月21日(土) 昨日からの雨の排水作業等。台風17号接近。
- 9月25日(水) 8号住掘り上げ、清掃・写真撮影。9号住調査に着手したところで降雨。
- 9月26日(木) 実測等を行い、8号住調査完了。9号住掘り下げ。北壁上部付近が水道管工事により攪乱を受けているので東西壁をみてから北へ壁際を追って行くこととする。遺物出土は少ない。
- 9月27日(金) 9号住北壁をほぼ確認。掘り込みは東側で約1mと深い。
- 9月28日(土) 9号住をほぼ床まで掘り下げ、床面調査にかかる。壁際に内側が袋状となる小ピットが並ぶ。主柱穴埋土の中央部が黒くなっている。
- 10月1日(火) 昨夜の雨の排水作業。9号住掘り上げ、清掃・写真撮影。
- 10月2日(水) 全体測量等を行い、本日で現場調査を完了する。
- 10月4日(金) 器材搬出及び整理。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形・地質

1. 位置 (第1図)

狐久保遺跡は長野県駒ヶ根市東伊那の伊那盆地及び中沢の原区にわたり、駒ヶ根市立東中学校敷地及び、その北側一帯付近に所在する。今回の調査対象地区となった道路付近は周知の分布域の北端にあたり、地番では駒ヶ根市東伊那996-3番地ほか7筆に及んでいる。

調査地区の緯度経度は北緯35度44分8～9秒、東経137度58分55～59秒で、座標系では第8系のX=-29.1～-29.2km、Y=-46.7～-46.8kmとなる。標高は631～636mで、調査地区より120m北に殿村四等三角点(635.22m)がある。

交通上から見れば、中央道駒ヶ根ICより駒ヶ根駅へ至り、駅から主要地方駒ヶ根一長谷線を東へ行き、天竜川と新宮川を渡った所、すなわち駅から3.7kmの所にある交差点から県道伊那・生田線を北へ650m程行くと市立東中学校前に至る。

2. 地形 (第2図)

並行して走る木曾山脈と赤石山脈の前山である伊那山地とに東西を挟まれた伊那谷の底を天竜川が流れ、天竜川の両側はいわゆる河岸段丘地形が発達していることで知られているが、当遺跡はこの天竜川左岸段丘の中段段丘上に立地している。

遺跡地付近の段丘の状況は、天竜川の氾濫原から比高約30mの段丘崖上が県道の通っている低位段丘面となり、さらに比高15m程の2段目の段丘崖上が遺跡の立地する中段段丘面となり、殿村三角点付近から北の遺跡全域を含む範囲に及ぶ。この中段段丘面より上の山麓地域は東高西低の傾斜をもって広がっている。

調査地区周辺の地形は、西側が100m程離れた所が段丘崖で、段丘崖上に井水が南へ流れている。南側の東中学校敷地は現在標高622～624mと造成のため切土となっているが、元はゆるやかに傾斜した段丘面が続いていたと思われる。その南は天竜川へとそそぐ新宮川の深い河谷となっている。東側の原区集落付近は調査地より5m程低くなっており、遺跡から400～600m位で伊那山地の山麓となる。北側は殿村三角点の辺りまで東から西へゆるやかに傾斜する段丘面が続いており、調査地区付近では4°程の傾斜をもつ。

なお調査対象となった道路の北側の土地は水田・畑として、南側は桑畑、西側は果樹園として利用されている。

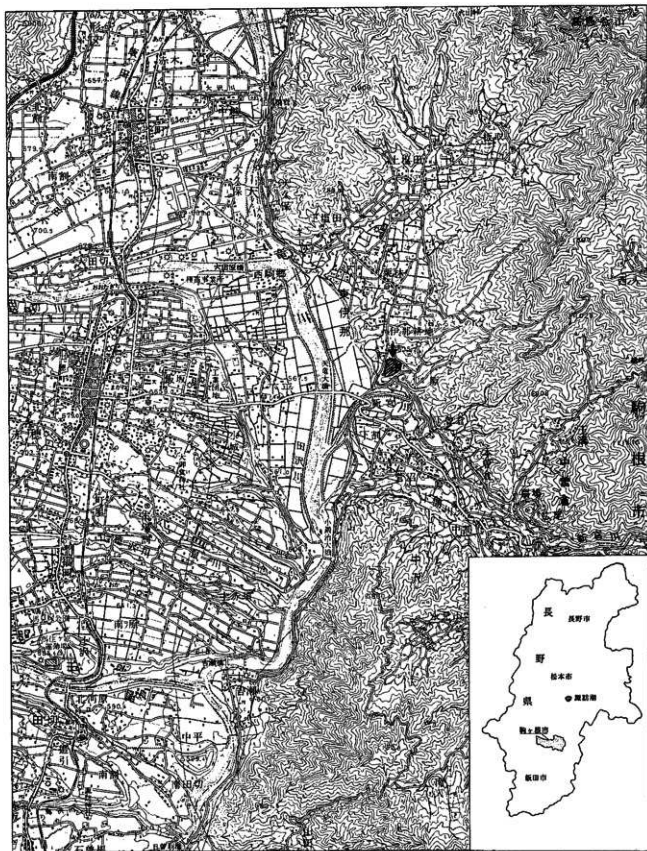
3. 地質

市域の地質基盤は、東の赤石山脈と伊那山地との間を中央構造線が走っており、基本的に傾斜帯に属する岩盤から成っている。

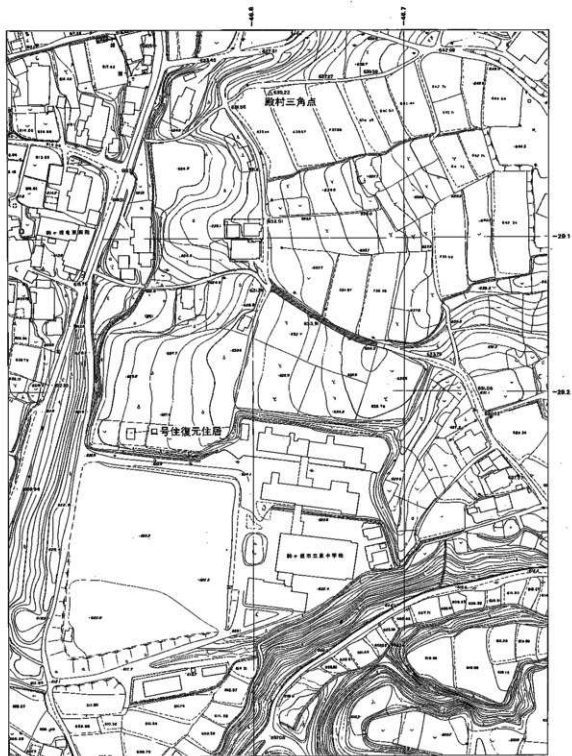
当地区の下層には、新宮川や埴田川等の伊那山地から流れ出て西流し天竜川へとそそぐ複数河川が形成する扇状地礫層が厚く堆積し、その上に御岳山噴火物を主とするテフラ質堆積物がのり形となっている。

テフラ質堆積物は御岳火山灰層の所々に軽石層あるいはスコリア層を挟む形で堆積し、下部には軽石層である御岳第1テフラ(0n-Pm1)が厚く堆積している。東伊那地区は上伊那地方でも最もこの0n-Pm1が厚い地域として知られ、その厚さは2m以上にも及び、昔は各所でこの土が白粘土化した白土(カオリン)の採掘が行われており、東中学校のグラウンド西付近でも採掘が行われていたという。

地形との関連では、中段段丘面は礫層の上にこの0n-Pm1以上のテフラ層をのせ、低位段丘面は新期テフラの上



第1圖 狐久保遺跡位置圖(S = 1 : 50000)



斜線部が第3次発掘調査地区

第2図 狐久保遺跡周辺地形図(S = 1 : 2500)

層のみをのせているという点で段丘面の区分がなされる。

テフラ層より上部は10cm程度の漸移層をはさんで、40～50cm位の厚さの黒色の表土となるが、調査地では耕作などによって必ずしも模式的な層位とはなっていない。

なお、遺跡調査ではこれらのテフラ層の内、黄褐色をした火山灰層土(赤土)を「ローム」と呼び常用して来たので本報告でも遺構等の説明に用いるものとする。

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡(第3図)

東伊那地区の河岸段丘上は、小河川が開折してできた丘陵状地形が発達するとともに各時代の遺跡が数多くあり、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」にも多くの遺跡が確認されており、以下、時代ごとに概観して行くこととする。

縄文時代の遺跡は、当狐久保遺跡(1)にも遺物散布が認められるほか、反目南(4)、殿村(13)から早期土器片がまとまって出土しており、前期では反目(5)と上塩田(11)で住居址が発見されており、殿村(13)でも前期住居址12軒が検出されている。

縄文中期も特に中期後半になると、伊那谷では遺跡数が爆発的に増加し大規模な集落が営まれるようになる。

例えば反目(5)の発掘調査では59軒の縄文時代の住居址が検出され、内中期中葉期が17軒、中期後葉期の住居址が38軒となっていた。このほかに中期後葉期の住居址が検出されたものとしては、山田(9)で10軒、殿村(13)で8軒、大久保北(10)で7軒が確認されており牧草のいとまがない。

後・晩期となると遺跡がまた減少し、青木北(12)で後期の環状配石址群が、上塩田(11)で晩期の配石群が発見されている。

弥生時代の遺跡も東伊那には重要なものが多く、当遺跡のほか丸山(2)では、昭和26年の調査で大型の後期住居址(第6図参照)が検出され、遊光(3)でも住居址1軒が、殿村(13)では住居址3軒のほか12m角程の方形周溝墓が発掘調査により確認されている。

反目南(4)では後期住居址2軒と方形周溝墓3基及び後期壱棺墓1基が検出され注目すべき遺跡である。

さらにその北の反目(5)では住居址17軒が調査され、全て後期のものであるが伊形態に違いがみられることから時期が細分できる可能性が指摘されている。

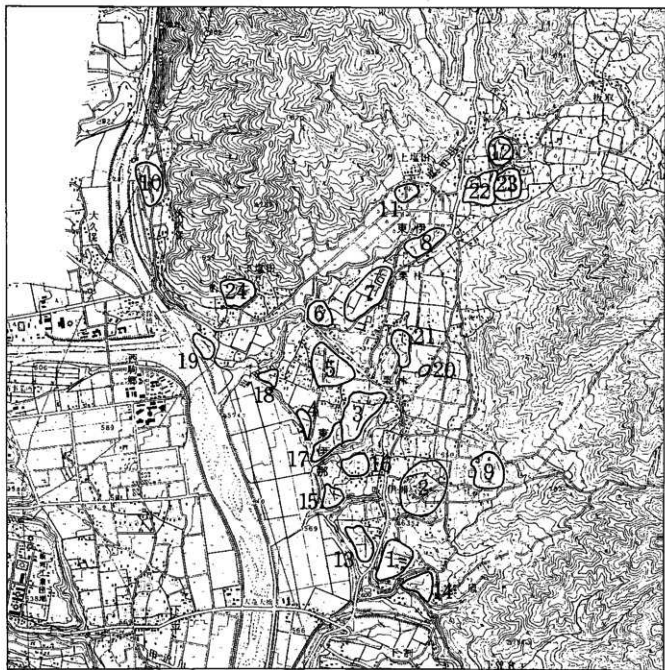
これら殿村、遊光、反目南、反目などは低位段丘面に位置し、この面より1段高い東側の中位段丘上には、垣外上(6)や、住居址1軒が調査された善込(7)がある。

さらに善込の東には栗林神社東(8)があり、住居址10軒とその50m西方に土壌を伴う壱棺墓1基が検出されており注目される遺跡である。

以上のように当地区における弥生時代の遺跡はいずれも後期、土器による時期区分では聖光寺原・中島式期のものである点が特徴的であり、近隣地域においても同様のあり方をみせる。

古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡には、遊光(3)、反目南(4)、反目(5)、上塩田(11)などがあるが、古墳については東伊那に少なくとも3基以上の円墳があったとされるが、いずれも既に消滅してしまっている。

天竜川左岸段丘上には、特にその立地条件を活かした中世城館跡が多いことで知られ、中沢地区の原城(14)は



- | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------|
| 1. 狐久保(縄文・弥生) | 9. 山田(縄文) | 17. 遊光城(中世) |
| 2. 丸山(#) | 10. 大久保北(縄文・弥生・平安) | 18. 高田城(#) |
| 3. 遊光(縄文・弥生・古墳
平安・中世) | 11. 上塩田(縄文・平安・中世) | 19. 大久保城(中世) |
| 4. 反目南(縄文・弥生・古墳
奈良・平安) | 12. 青木北(縄文・弥生・平安
中世・近世) | 20. 城村古城(#) |
| 5. 反目(#) | 13. 殿村(縄文・弥生
奈良・平安) | 21. 城村城(中世) |
| 6. 垣外上(縄文・弥生
古墳・平安) | 14. 原城(中世) | 22. 青木城(縄文・平安
中世) |
| 7. 善込(縄文・弥生・古墳) | 15. 稲村古城(中世) | 23. 青木(縄文・平安
中世・近世) |
| 8. 栗林神社東(縄文・弥生) | 16. 稲村城(中世) | 24. 箱壘(平安・中世) |

第3図 狐久保遺跡周辺遺跡分布図(S = 1 : 25000)

じめ、東伊那地区では稲村古城(15)、稲村城(16)、遊光城(17)、高田城(18)、大久保城(19)、城村古城(20)、城村城(21)、青木城(22)及び上塩田集落の北の尾根には塩田城がある。

また、遊光(3)では15世紀末の住居址に炭化材が良好な状態で残存しており、陸屋根式構造をもつ住居であったとみられ貴重な例である。

近世では、特に山田遺跡の西方に山田の富士塚と呼ばれる塚と溜め池が良好な状態で残されており、市の史跡指定を受けている。

2. 狐久保遺跡第1・2次調査について(第4～7図)

ここで当遺跡のこれまでの調査結果について触れておきたいが、詳細な報告は友野良一氏が、それぞれ雑誌『信濃』と『伊那路』とに発表(参考文献章末)しているので、以下概要のみにとどめる。

(1) 狐久保遺跡第1次調査(昭和25～26年)の概要

現在の市内東伊那は市の合併前は伊那村であり、現在の殿村、狐久保、山田及び丸山の各遺跡は総称して伊那村遺跡と呼ばれて、昭和25年から昭和26年にかけて2次にわたる発掘調査が行われた。この時の調査が狐久保遺跡の第1次調査ということになる。

伊那村遺跡第一次調査に先立つ昭和23年から24年にかけて既採集遺物の調査及び表面採集が行われ、この結果に基づき昭和25年に約5haの範囲が調査研究地として限定された。

同年10月、県史蹟調査委員宮坂英次氏の指導を受け、友野良一氏等によって山田遺跡第一号住居址及び狐久保遺跡イ号住居址の発掘が予備調査として行われた。

この発見により伊那村文化財保存会が発足し、山田遺跡第一号住居址の復元を行うとともに、塩尻市の平出遺跡の調査に来ていた國學院大学の太場馨雄教授に學術調査の依頼をした。

そして昭和26年4月、太場教授を調査委員長として、調査委員には県史蹟調査委員の市村威人氏、一志茂樹氏、宮坂英次氏、そして東京大学の藤島玄治郎教授を依頼し、調査員には國學院大学から亀井助手、院生の上川名氏、学生の椎名、河西、桐原の諸氏を迎え、村をあげての協力のもと発掘調査が行われた。

予備調査も含めて、この第一次調査では山田遺跡で縄文時代中期後葉期の住居址6軒、竪穴址4基が発掘され、狐久保遺跡では弥生時代後期のイ～ニ号の4軒の住居址が調査された。

同26年11月には、伊那村遺跡第二次調査として、山田遺跡と狐久保遺跡との中間に位置する丸山地区(現丸山遺跡)並びに殿村遺跡で発掘が行われた。丸山地区では縄文時代中期中葉期の住居址1軒と、7.6×6.6mの大型で石組炉を2箇所有する弥生時代のホウ住居址(第6図参照)とが検出され、殿村遺跡では奈良時代末から平安時代初位の時期の住居址1軒が検出された。

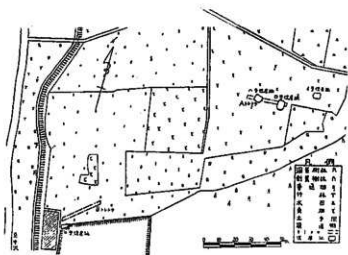
現在では周辺その他遺跡等の調査もなされ状況は違ってきているが、当時の見解として、低位段丘上に平安時代の殿村遺跡があり、中位段丘上に弥生時代の狐久保遺跡が、山麓に縄文時代の山田遺跡があり、さらに山田と狐久保の中間にあたる丸山で縄文と弥生同時代の遺構がみられたことから、時代の推移とともに高地から低地へと遺跡の立地も変わって行くものとする考察もなされている。

(2) 狐久保遺跡第2次調査(昭和38年)の概要

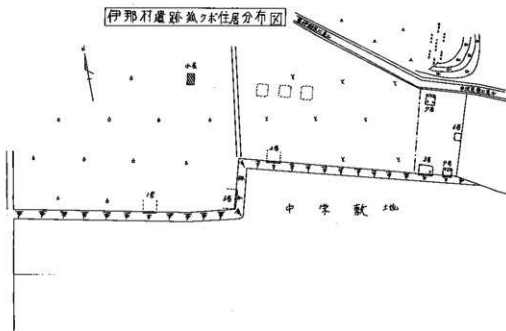
狐久保遺跡の第2次調査は、市立東中学校建設の造成工事に伴い、昭和38年12月に緊急発掘調査が行われた。

発掘担当者は友野良一氏と林茂樹氏で、第一～七号の竪穴址が確認されている。ただしこの内第二号と第五号址については切土断面に露呈したもので発掘は行えず位置のみの記録で、また第六号址については3×5mと小型で柱穴及び炉が存在せず、住居址ではない倉庫的なものであったのであろうと報告されている。

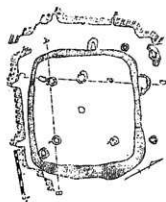
以上、当遺跡のこれまでの調査について概要を記して来たが、住居址あるいは竪穴址の内容については第IV章



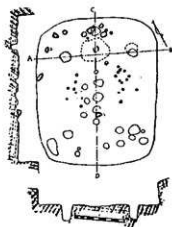
第4図 狐久保遺跡第1次調査住居址位置図(S = 1 : 2000)



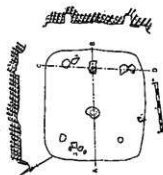
第5図 狐久保遺跡第2次調査住居址位置図(S = 1 : 2000)



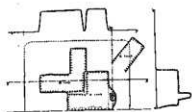
1号住居址



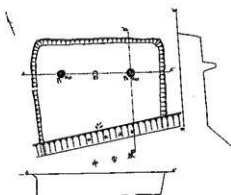
10号住居址



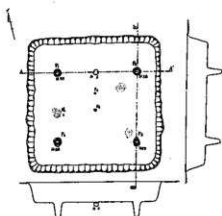
8号住居址



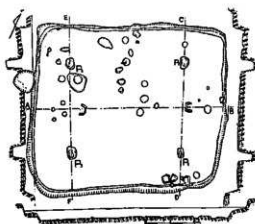
第3号住居址



第4号住居址

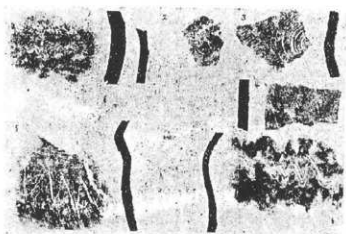


第7号住居址



〔参考〕丸山遺跡10号住居址

第6图 狐久保遺跡第1・2次調査住居址実測図(S=1:150)



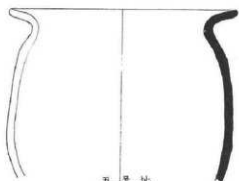
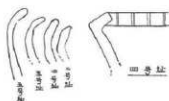
イ号住居址出土
打製石包丁

狐久保見親生式土器石影

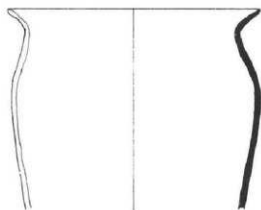
1 底片 (割取層) 2 脚 3 脚 4 脚
5 脚 (割取層) 6 脚 (割取層)



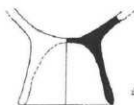
七号址



五号址



四号址



四号址



四号址



四号址

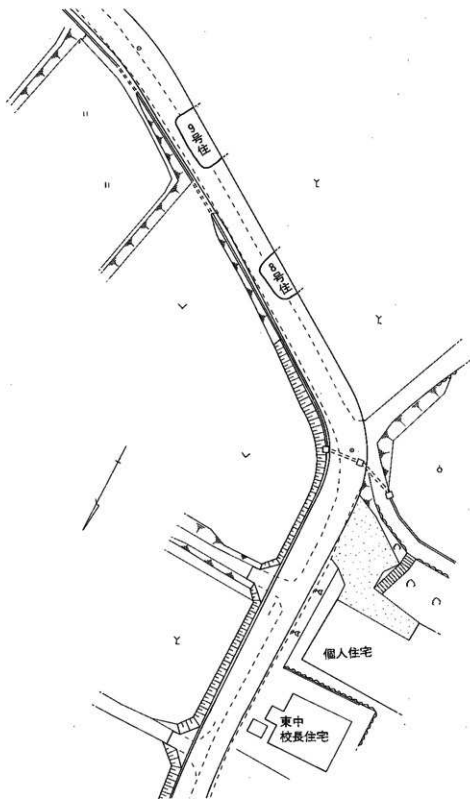


四号址



四号址

第7図 狐久保遺跡第1・2次調査出土遺物(S=1:3)



第 8 図 狐久保遺跡第 3 次調査遺構位置図(S = 1 : 500)



(住居址位置は概略位置)

第9図 狐久保遺跡住居址分布図(S = 1 : 2000)

の後に狐久保遺跡住居址・竪穴址一覧表としてまとめてあるのでご覧いただきたい。

【参考文献】

- ・友野良一他「長野県上伊那郡伊那村遺跡第一次調査概報」『信濃』第三巻第六号 1951年
- ・藤島玄治郎・友野良一「長野県上伊那郡伊那村遺跡復原住宅の考察」『信濃』第三巻第十一号 1951年
- ・友野良一他「長野県上伊那郡伊那村遺跡第二次調査概報」『信濃』第四巻第十一号 1952年
- ・友野良一「駒ヶ根市東伊那狐クボ遺跡調査概報」『伊那路』第8巻第9号 1964年

第三章 発掘調査

第1節 発掘調査の概要 (第8・9図、写真1)

調査原因となった工事の計画は、幅2.8mの現ほ装道路を幅4mに拡幅改良し再ほ装するというもので、平成7年9月、現道路南側の未ほ装部分を試掘した。東側50mについてはすでに現道工事のため掘り下げられていることが明らかであったため調査から除外し、西側の幅1.5m延長75mの範囲でトレンチを掘った結果、2箇所で住居址と思われる落ち込みを確認し、3箇所で不明瞭な落ち込みがわずかにかかっていた。

この試掘結果に基づき発掘調査は、幅4m×長さ82.5mの面積330㎡の道路工事予定範囲内で実施することとなった。道路ほ装と表土は重機によってローム漸移層上まで除いてから、遺構の輪郭を確認できるまでジョレンがけで漸移層を掘り下げて遺構の確認に努めた。

位置の記録は予定道路センターポイントにより特定し、標高は調査地区北方にある殿村四等三角点635.22mから測定し調査用ベンチマークを設定して使用した。

調査結果は弥生時代後期の住居址2軒が、調査対象地区南側にかかって検出された。現道路中央部は2度にわたる水道管理設工事のため攪乱を受け、第9号住居址の北壁上部は破壊されていた。

なお遺構番号について、第1次調査で使用された住居址番号「イ～ニ号」はそのまま残り、第2次調査で使用された住居址番号「一～七号」はカタカナ番号との混同を避けるため算用数字「1～7号」に改め、今回の調査で発見された住居址は、西側のものを第8号住居址、東側のものを第9号住居址と呼ぶこととした。

ただしこの内、第2次調査で調査された第6号址については柱穴や炉が無く、住居址ではなく倉庫的なものであろうと報告でも考察されており「竪穴址」の名称が用いられている。

このような経過があるので遺構番号がそのまま遺構数とならない点、今後とも注意が必要となる。

また、伊那村遺跡第二次調査で検出された丸山地区の弥生時代の住居址にロ号址の名称が付けられたが、現在は遺跡分布図上でも、この丸山地区は丸山遺跡として知られているので、ここでは狐久保遺跡とは別の遺跡の遺構と考えたい。

第2節 遺構及び遺物

1. 第8号住居址 (第10・12図、写真2・3・6～8)

(1) 遺構 (第10図、写真2・3)

当住居址は第9号住居址の西方14mに位置しており、調査地区に北半部がかかる状態で検出された。

プランは辺の中央部がやや外に張り出す形の隅丸方形もしくは隅丸長方形になると思われる。規模は東西方向で約6mを測る。掘り込みは斜面に作られているため南東側が深く北西側が浅くなっており、東壁で80～90cm、西壁で40～60cm、北壁の中央で70cm程度となる。また推定される主軸方向はN-31°-E位になる。

柱穴は各壁から約140cm内側で、北寄りの2本の主柱穴P1・P2が検出された。44×30cmと両方とも南東-北西方向に長く、長辺の真中がややくびれた形で底形も同じ形となり、底は平らでなくやや丸くなる。柱穴の壁はかなり固く締まっており、深さは両者とも35cmを測る。

柱間186cmの中央部、柱間を結んだ線より外側には埋甕炉がある。使用土器は甕で、口縁部と胴下半部を欠いて頸部から胴上半部を使用している。炉の作りは、径50×60cm深さ35cmの椀形の穴を掘り、底に厚さ10cm位までローム土を入れた後、中央に土器を据えて、土器の周囲にもローム土を入れて固定していることが断面観察からわかる。土器の周囲に入れたローム土の表面は焼けて粒状に脆くなっており、埋甕内部には1cm大の焼土粒を含む茶褐色土が入っていた。

床面は全般に軟らかいソフトロームのままだったが、部分的に固く締まっている場所が2箇所認められる。

東側のものは、北壁から80cm離れた所から北東-南西方向で東壁添いに幅40～50cmで帯状に続いている。これに対して西側のものは、西壁添いに幅40～50cmで、北東-南西方向に続き、北壁添いに60cm延びた所で止まっている。これらは周りの軟らかい床面より1～2cm程度高くなっているが段差はほとんどない。このように両者は主柱穴より外側の外区左右にあって、炉の奥までには及んでいない。

(2) 遺物 (第12・13図、写真6～8)

当住居址では覆土上層から床面まで、ほぼ片寄ることなく均一に遺物が出土している。

土器は第12図中1～10が壺、11～22が甕と思われる。壺の口縁部片は1～3があり、1は直に近い頸部からの立ち上がりから45°位外反する口縁をもち、口縁端部は幅9mmで縦の刻み目が付けられる。調整は横ハケ目で、色調は淡茶褐色で黒斑がある。2は口縁部で大きく外反し、その端部は直角に近く折立する受口口縁となるタイプで、幅28mmの口縁端部に縦の刻み目を付ける。胎土は5mm以下の長石・石英等の砂粒を含み、特に細かないいわゆる金雲母が目立ち、色調は茶褐色を呈する。3は2と同じ口縁形状だが口縁端部幅は20mmとやや狭く、櫛描波状文を施すもの。胎土は3mm以下の砂粒を含み、やはり極細かな金雲母が入っている。

壺に見られる文様は櫛描で波状文・4分の1直弧文(厩状文)・直線文・斜行短線文などを頸部から胴上半部にめぐらせており、4のような厩状文を付す破片(二次的に焼けている)もみられた。

壺の胎土で特徴的なものとして、細かな金雲母を含むもの(1・3・7)、茶褐色粒を含むもの(7・10)があり、また5～8のように内面が剥離するのは在地の壺の特徴として見られる。

甕は口縁部の外反の度合いが小さいもの(11・14)から大きいもの(12・13・21)まである。文様は頸部から胴上半部にかけて櫛描の波状文・斜行短線文を施すものが多いが、15のように横の短線を頸部に付すものも見られた。

21の甕は、炉の近くの覆土下層出土の破片が底部を除き接合できたもので、文様は7単位の櫛描波状文を2段、頸部にめぐらせる。口径18cm 高18.7cmで器厚は8～9mmと厚く、色調は暗い灰淡褐色を呈し、胎土には1mm以下の非常に細かい砂粒が入る。調整は指ナデで、口縁内面では横位の調整痕が段になっている。

22は頸部の径が24cmと大型の甕である。口縁部と胴下半部を欠き、高さ12cmの輪状となった部分が埋甕炉に転

用されている。器厚は6mmと薄手で、内面には平均20～25mm幅の輪積痕が認められる。色調は外面が淡茶褐色、内面は淡灰褐色を呈し、胎土は3mm以下の長石・石英等の砂粒を含み、細かい金雲母が含まれる。器面調整は外面に化粧土をかけたのち横の後縦のナデで、内面は横ナデのみである。

23～26は土器底部片で、26の台部は中実となっており台付環の台部であろうか。

第13図の1は、覆土上層から出土した土製紡錘車の破片で、中央部が部厚くなるタイプのもので厚さ20mmを測り、直径は6.5cm前後になると思われる。孔径は8～9mm、現在重量が34g。胎土には2mm以下の長石・石英等の砂粒が多く入る。色調は灰暗褐色を呈する。

第13図2～8は出土石器である。2は粘板岩製の打製石包丁で、刃部に57mmにわたって使用痕が認められる。

3も刃部は丸くなるが打製石包丁と思われ、緑色岩製で刃部の摩耗は裏面(剥離面側)で特に幅広く認められる。

4は細長い緑色岩の河原石を利用した磨石で磨面は3面あり、表裏2面が平らな面と丸い面、片方の端に垂直から20°程傾けて使用されたと思われる磨面がある。5の礮器は粘板岩で上下2箇所に打撃痕が顕著なもの。6は硬砂岩製の片刃をもつ石器。7は花崗岩製で表裏に砥面をもつ砥石。8は基部が欠損した打製石斧で、用途は石鉾であろう。

2. 第9号住居址(第11・13図、写真4・5・7～8)

(1) 遺 構(第11図、写真4・5)

当住居址は第8号住居址の東方14mに位置し、調査区に住居北側がかかる形で検出されたため南側の大半は未調査である。そのためプランも不明だが、隅丸方形か隅丸長方形になると予測され、調査できた3辺の壁が直線的なことから、角が直角に近い形になることからより方形か長方形に近いプランになると予想される。

規模は北西-南東方向で7.8mを測る大型な住居址である。推定される主軸方向はN-37°-E位となる。

掘り込みは斜面に掘られているため、南東側が深く北西側が浅くなり、東壁で65～80cm、西壁で50～60cm位で、北壁及び東西壁の一部の上部50cmは水道管理設工事のため破壊されていた。壁は直に近く立ち上がり、壁面は東壁など比較的締まっていた。

主柱穴はP1・P2の2本が検出され、P1は北壁から130cm東壁から150cm内側に、P2は北・西壁から145cm内側の位置で掘られている。P1は径46×30cm深さ73cm、P2は径28×20cmと小さく深さは75cmを測り、断面で示したとおり内側が抉れたような掘り込み形となる。両柱穴の埋土には柱底とみられる部分がある。すなわち埋土には茶褐色土が入るが、深さの半分より下では黒茶褐色土がその内側に入っていた。黒茶褐色土は第11図のスクリーン貼付箇所のような平面形で20×13cmを測り、径13cmの丸い柱根2本分とみることができる。

炉は調査部分では発見されなかった。

床面は全面固く締まっており、小さな凹みが多数認められた。断面が碗形になるものが多く、皿状になるものもある。深さは4～13cmで4～7cm位のものが多い。

また本住居址内の壁際には小ピットが間隔をもって並んでおり注目される。P3～P12までが壁際にあるが、P10は深さ16cmと浅めであるので別種の穴かもしれず、北壁中央にあるP17も径26cmと他の穴より大きい。多いのはP4・6・9・11・12のような20cm×12cm位の平面形が楕円形となる穴である。また断面図に見るとおり穴の上部が抉れる特徴的な掘り込みが多く、P8やP12などは壁の方にやや寝て斜めに掘られていた。

以下、穴の中心での柱間寸法と深さ(カッコ内)とを列記しておく。

P3(58cm)←146cm→P4(28cm)←82cm→P5(24cm)←190cm→P6(51cm)←178cm→P7(38cm)←167cm→P8(24cm)←132cm→P9(39cm)←28cm→P10(16cm)←44cm→P11(32cm)←140cm→P12(29cm)

(2) 遺物 (第13図、写真7・8)

部分的な調査という面もあるが、当住居址の遺物出土は少なめで、土器片も50片位の出土しかみなかった。

図示した土器は11の底部が床面出土であるが、9・10は覆土上層からの出土である。9は壺の頸部下部分の破片で内面は刺障する。文様は直線文の下に振幅の大きい7単位の波状文をめぐらせ、その下には斜行短線文を施す。胎土は5mm以下の粗い長石・石英等を主に金雲母も含まれる砂粒を入れ、色調は暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。10は壺の口縁破片で、頸部から口縁端まで4cmの口縁部が直角に近く「く」の字に外反するもの。胎土は長石・石英を多く含み、色調は黒灰褐色を呈し、焼成は悪く脆い。内外面には横ハケ目の調整が認められる。

12～16は出土石器である。12は片刃のノミ型石器で、緑色岩切片の先端を研磨して幅14mmの直刃を作り出しており、わずかだが基部の端の一部が摩耗している。13は硬砂岩製の打製石包丁で、刃部全体にわたって端部両面が摩耗している。14は硬砂岩製の紡錘車で住居の西壁近くのP3の北東30cmの床上から出土したもの、直径63mm、孔径8～9mm、厚さは7～12mm、重量は60gとなっている。また色が赤みががっており焼けている。15は緑色岩の磨石で、やはり床上から出土しており表面は非常に滑らかになっている。16も床上出土で、北壁際の中央にあるP7の南東で検出された据置き式の硬砂岩製砥石である。片側3分の1程が欠損しており、現長250mm、現幅72mm、厚さ46mmを測り、表裏2面に平らな砥面をもつ。

第IV章 考 察

今回の第3次調査によって検出された遺物は、弥生時代後期の整穴住居址2軒のみで、そして部分調査にとどまったので、ここではこれまでに調査された当遺跡の住居址構造について、若干の気づいた点など検討を加え、問題点を指摘してまとめに換えたい。以下、今回調査住居址の特徴的な点を記し、次に総合的な住居址の傾向について考えていくこととする。(第4～9図)

今回の調査で発見された第8号住居址では床面の固さに違いが見られた。岡谷市の橋原遺跡や下伊那郡松川町の前田遺跡などでも床面の固さの違いが観察され、このことから住居内部の空間の使用され方について考察されている。一般に床面が固い箇所は人が歩くなどして踏み固められた場所で、一方軟らかい箇所は床板や敷物がしかかれていたとか、物が上に置かれていた、あるいは人の立ち入らない場所であったと推測されている。これに加えるならば、薄目の敷物などの上の人が寝て毎日重量がかかっていたら床も固くなるという考え方もできると思われる。いずれにしても住居建築時に床を締めていない場合の事例を前提としている。第8号住居址では、支柱穴を四角に結ぶ線より外側の住居の外区と呼ばれる場所の左右に固い部分が細長く続き、そのほかの内区や炉の奥などは軟らかいままであった。

第9号住居址で注目されるのは壁際に小ピットが配置されている点で、調査できた部分では北及び東・西各壁際にみられ、東壁・西壁では未調査部分の南へまだ続いている感がある。用途としては、この穴に細い支柱をたてて、垂木や土止めのもやい柱として使用したか、あるいは住居に壁があってその間柱であったということが考え得る。同時期の他遺跡の住居で、一方の壁際に小ピットが並んでいる場合は欄があったとされる場合が多いが、第9号住居址では少なくとも3方にあり欄とは考えにくい。

次に当遺跡の住居址を中心に総合的な住居址構造の傾向をみていく。

まず住居址プランを見ていくと、イ号址とハ号址とは主軸方向にやや長くなるものの、ほぼ隅丸方形といってよい形で、その辺はやや丸みを帯びて外に張り出し、規模も同じ位となる。ロ号址は隅丸長方形で、弥生時代後期の上伊那(注:)に最も多く見る形である。第8号址も隅が丸く壁が外にやや丸くなっているため、同形の隅丸長方形か隅丸方形になると予想される。第4号址と第7号址とは、第4号址の南半が調査されていないが両者とも各辺が直線的なより方形に近い5m角の隅丸方形の住居址になると思われる、このタイプの住居址は弥生時代後期の下伊那に多い形である。また第5号址については、ごく一部の調査のみで内容も不明だが、一辺の長さが約8.5mと大型の住居址であることがわかっている。ここで丸山遺跡のロ号址の例を見ると、7.6×6.6mと大型で、辺が直線的な長方形に近い隅丸長方形の住居址であり、このような大型で長方形、方形または台形に近い形となるタイプの住居址は諏訪を中心に上伊那にもみられる。第9号址も一辺が7.8mと大型で壁が直線的なので、これらの大型住居址と同タイプであった可能性が高い。

住居内に設けられる炉について、当市域の後期では4本の主柱穴のうち奥寄りの2本の中間付近に埋燵炉を設ける例が多くなる。この奥寄り2本の主柱穴を結んだ線より外側(住居奥)に炉が位置するものにイ号址、ロ号址、第8号址があり、線より内側に位置するものにハ号址が、線上に位置するものに第4号址、第7号址がある。また丸山遺跡ロ号址は長軸方向に相対して2箇所の石組炉を持ち、このタイプの大型住居址では短軸方向からの平入りとなつていられる。このことから同タイプの第9号址も調査では炉が検出されなかったが、東西寄りの中央付近に炉があると考えることができる。なおイ号址では奥寄りの主炉の他に住居中央に炭化物の入った甕が埋められており、ハ号址では埋燵の周囲に炉縁石を置いている。ロ号址の埋燵の周りは焼土が認められ、第8号址炉の状況と共通する。

また、第4号址と第7号址及び第6号址からは多量の炭化材が検出されている。このうち第6号址は3×5mと小型で柱穴も炉も検出されていないので、第2次調査報告でも倉庫的なものであったらうと考えており、ここでも住居址以外の施設と考えたい。

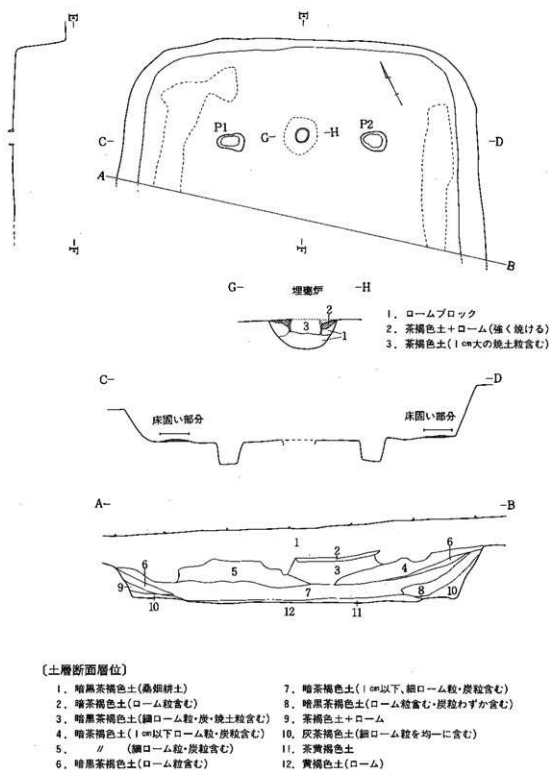
これらの所見からすると、少なくとも第4号址と第7号址は住居址の構造で規制の強い下伊那の影響下にあり、近接してること、主軸方向もほぼ一致すること、同時期に焼けている可能性が高いことなどから、両住居は同時期に存在していたと考えることができる。当遺跡の住居址は未調査や部分調査のものが多いので集落を論ずることはできないが、近隣地域の他例では2軒もしくは3軒を1単位として住居が変遷して行く例が多いことから、この両住居についても1単位のものと考えたい。

上記で住居址の構造についてみてきたが、当遺跡にも上伊那的な要素をもつものと下伊那的な要素をもつものとが混在しており、北と南から相互に影響を受けるという点で、伊那谷の中央部に位置する当市域のあり方が示されている。今後の問題として南北の地域差、その中間にある当地域の独自性の問題、弥生時代後期における時期細分等、問題点が多々あるが、以上をもって簡略ながら報告とし今後の研究に期したい。

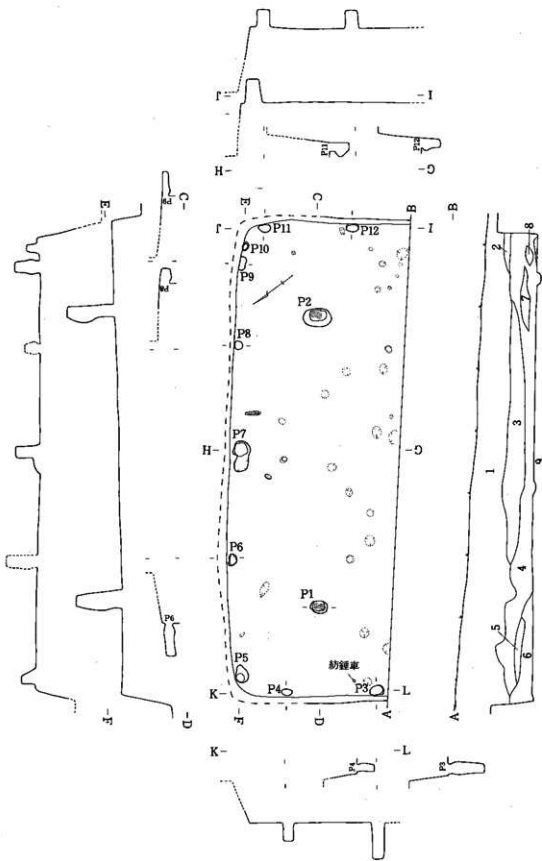
(北 澤)

注：現在の行政区分ではなく、また該期の伊那谷を区分する線引きが明確にできないので、ここでは南北に長い伊那谷の北半を上伊那、南半を下伊那として用いるにすぎない。

【参考文献】 神村 透「IV. 住居と集落 3. 弥生時代の住居と集落」『長野県史』考古資料編全1巻(4)
長野県史刊行会 1988年



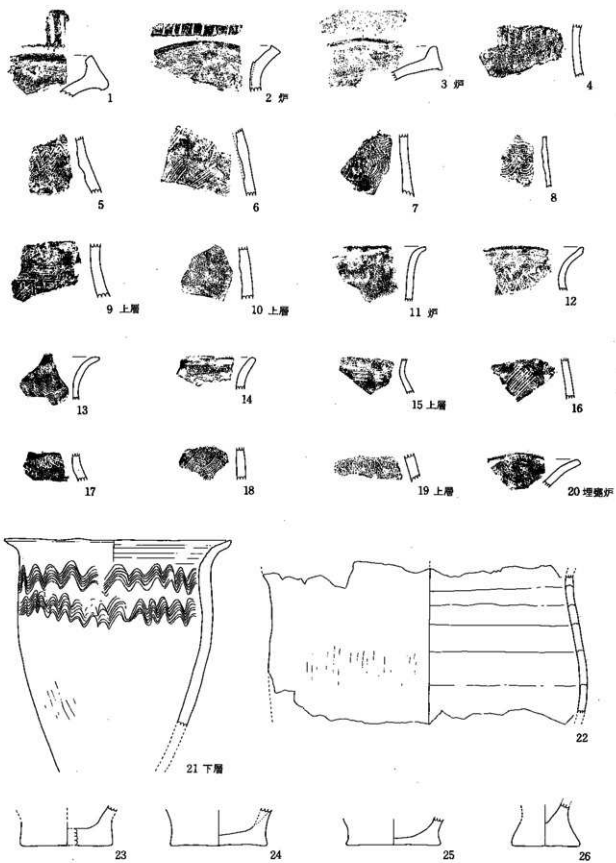
第10図 第8号住居址実測図(S=1:60, ただし伊断面はS=1:30 標準レベルはG-Hを除きL=633.100m)



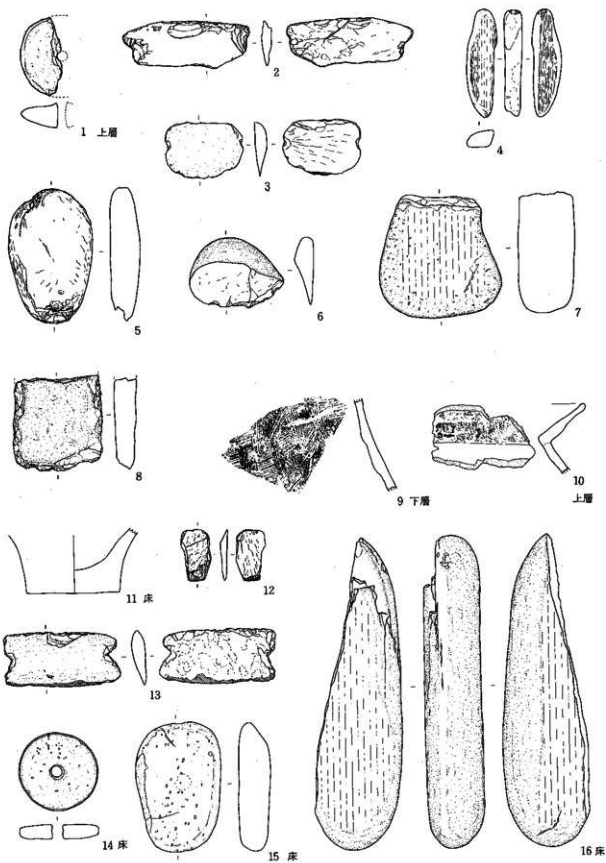
(土層断面層位)

1. 黒茶褐色土(礫土)
2. 暗茶褐色土(ローム多量)
3. 黒茶褐色+暗褐色土(2cm以下のローム多量)
4. 暗茶褐色土(細ローム散在、炭粒わずか含む)
5. // (2cm以下のローム多量)
6. // (5より色濃い、ローム多量)
7. 暗茶褐色土(ローム多量)
8. ロームブロック
9. 黄褐色土(ローム)

第11図 第9号住居址実測図(S=1:60、標準レベルL=634.000m)



第12图 第8号住居址出土遗物实测图·拓影



第13图 第8号·第9号住居址出土物实测图·拓影(S=1:3)
 1~8 第8号住、9~16 第9号住出土

狐久保遺跡住居址・竪穴址一覽表

遺構名	平面形 (300級)	主軸方向 (カッコ内推定)	規模 (m)	主柱 穴数	炉形態 (位置)	備考
イ号 住居址	隅丸 方形 (北-東)	N-66°-W	4.5× 4.1	4	埋壘炉 2 (A1・B1+中)	住居中央部の炉は焼土を伴わず炭のみ。土器少量。床固い。
ロ号 住居址	隅丸 長方形 (北-東)	N-28°-E	6.0× 4.0	4	埋壘炉 1 (外)	打製石包丁、土器少量出土。床固く、小凹み多くある。
ハ号 住居址	隅丸 方形 (北-東)	S-58°-E	4.2× 3.8	4	石組埋壘炉 1 (内)	中央付近に径55cmの楕円形ピット。土器多く、鉄片も出土。
ニ号 住居址	不明	不明	—× (4.0)	不明	不明	白土探掘断面に見え。土器少量出土。床・壁に小ピット。
第1号 住居址	"	"	不明	(1)	"	造成断面で見え。土器集中箇所あり。柱穴から壘上部出土。
第2号 住居址	"	"	"	不明	"	造成断面で見えされ未調査。
第3号 住居址	"	"	—× 6.3	"	"	造成断面で見えされ一部の調査のみ。
第4号 住居址	" (直線形)	(N-16°-E)	—× 5.0	(2)	埋壘炉 1 (線上)	造成断面で見えされ北半のみ調査。多量の炭化材出土。
第5号 住居址	"	不明	8.5× —	不明	埋壘炉 1 (線南)	造成断面で見えされ一部の調査のみ。最大規模の住居址。
第6号 竪穴址	隅丸 方形 (直線形)	"	5.0× 3.0	なし	なし	柱穴・炉なく、内部から木炭が多量に出土。深さ等不明。
第7号 住居址	" (直線形)	(N-15°-E)	4.9× 4.8	4	埋壘炉 1	中央部に小ピット2有。炭化材出土。土器数十片と石鏡。
第8号 住居址	不明 (北-東)	(N-31°-E)	—× 6.0	(2)	埋壘炉 1 (線上)	床は外区に固い部分あり。遺物は多く、土製紡錘車1出土。
第9号 住居址	" (直線形)	(N-37°-E)	7.8× —	(2)	不明	壁際に小ピットが並ぶ。大規模な住居址。石製紡錘車出土。

- 注 1). 未調査住居址を除き時期はすべて弥生時代後期に属する。
 2). 主軸方向のカッコ内は推定値であり、参考のために示したが誤差がある。
 3). 主柱穴数のカッコ内は調査で確認された現数を示している。
 4). 炉位置の外・内・線上は柱穴を結んだ場合の表現である。



1. 遺跡遠景(北から)



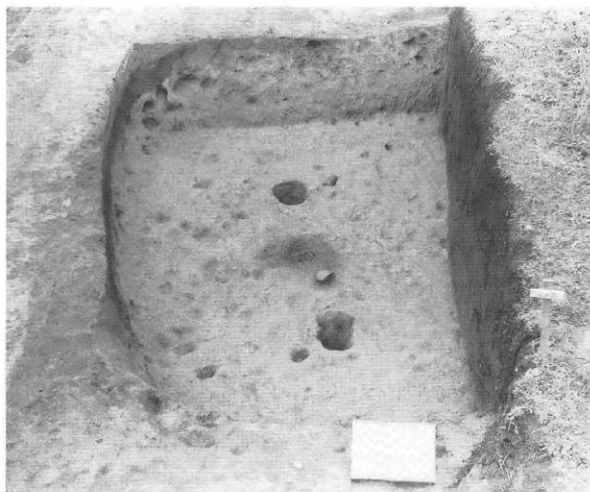
2. 第8・9号住居址(手前9号・奥8号、東から)



3. 調査前状況(西から)



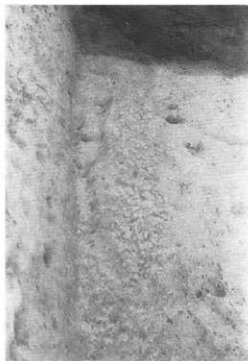
4. 口号址復元住居



1. 全 体 (西から)



2. 西側床固い部分(北から)

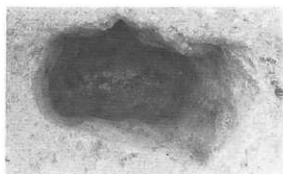


3. 東側床固い部分(北から)

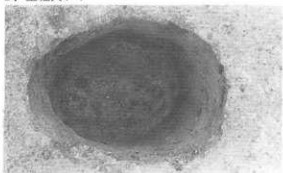
第 8 号 住 居 址



1. 埋壺炉



2. 主柱穴 P 1



3. 主柱穴 P 2

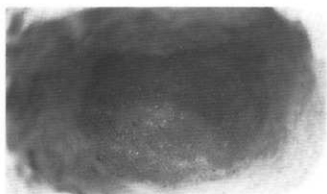


4. 埋壺炉(断面、南から)

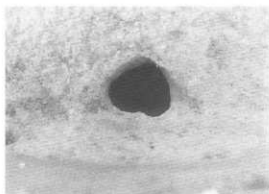
第 8 号 住 居 址



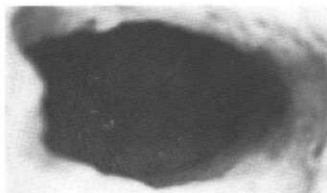
1. 全 体(西から)



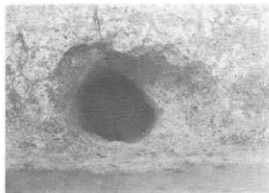
2. 主柱穴 P 2 埋土状況



4. 壁際小ビット P 6



3. 主柱穴 P 1 埋土状況

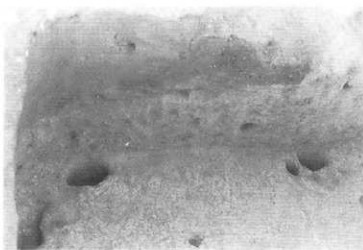


5. 壁際小ビット P 7

第 9 号 住 居 址



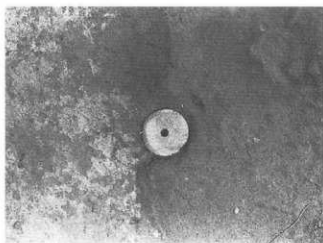
1. 西壁際小ピット列(北から)



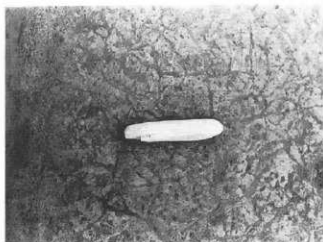
2. 東壁際小ピット列(西から)



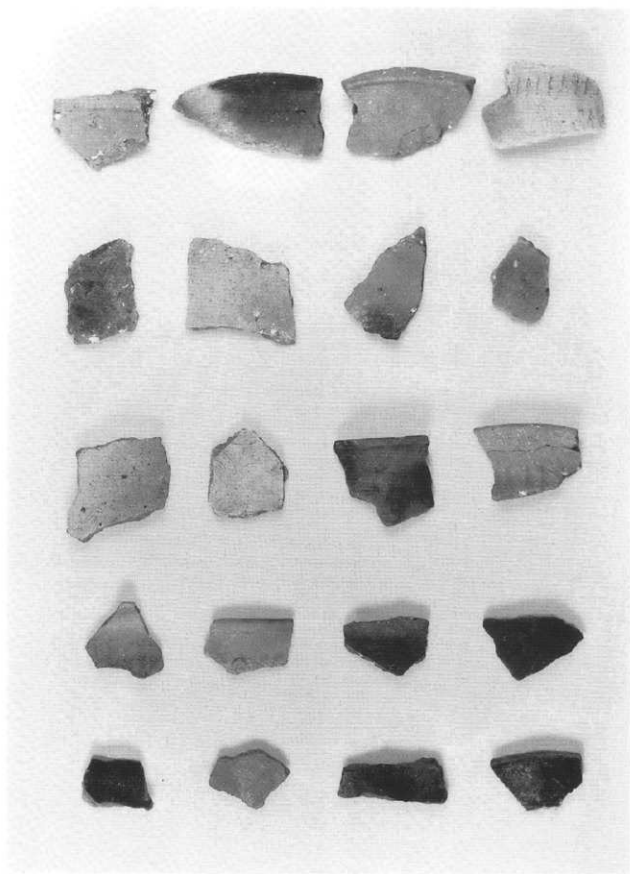
3. 北壁際小ピット列(西から)



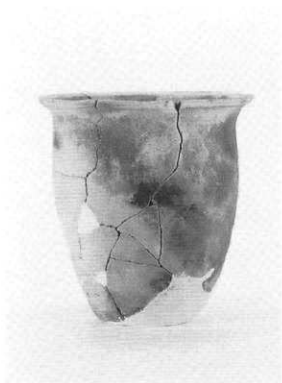
4. 石製紡錘車出土状況



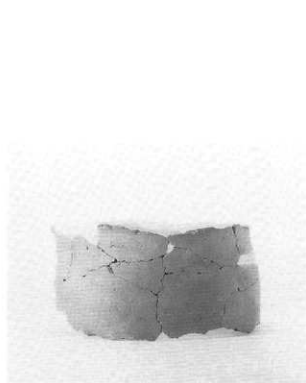
5. 砥石出土状況



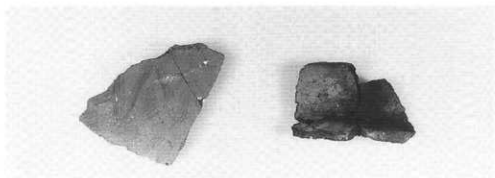
第8号住居址出土土器



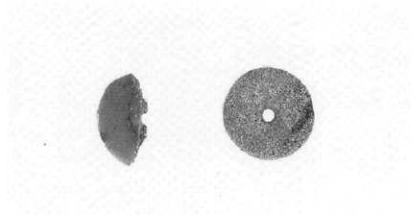
1. 第8号住居址出土甕



2. 第8号住居址埋壘炉土器

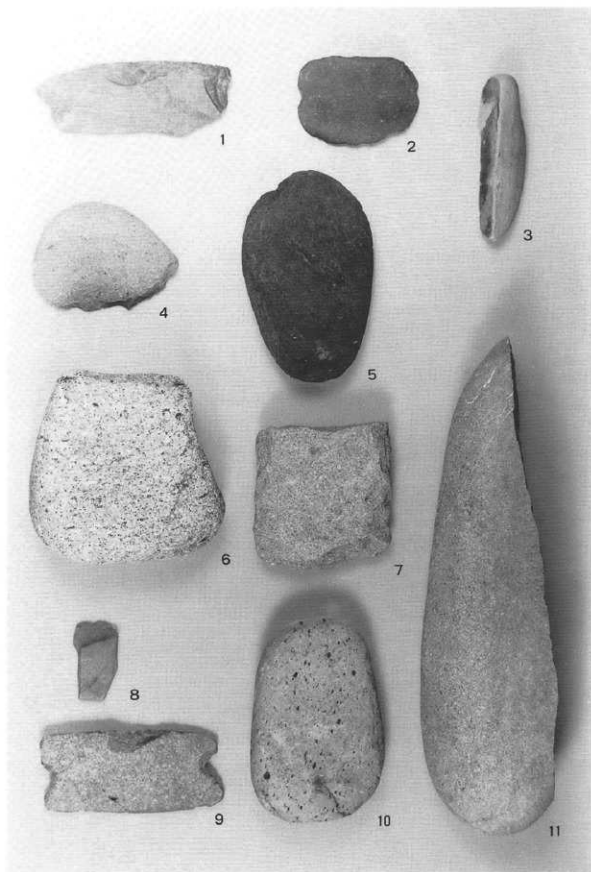


3. 第9号住居址出土土器



4. 住居址出土紡錘車(左-8住出土土製、右-9住出土石製)

第8・9号住居址出土遺物



第8・9号住居址出土石器

(8住出土-1-7、9住出土-8-11)

報告書抄録

書名	*0265-83-1135 狐久保遺跡						
副書名	農村総合整備モデル事業殿村北線 道路改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査						
シリーズ名	発掘調査報告						
シリーズ番号	第37集						
編著者名	友野良一 北澤武志						
編集機関	狐久保遺跡発掘調査団						
所在地	〒399-41 長野県駒ヶ根市上穂栄町23番1号 Tel.0265-83-1135						
発行年月日	西暦 1997年 3月 20日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	
*0265-83-1135 狐久保遺跡	長野県駒ヶ根市 D01110 東伊那	市町村 20210 遺跡番号 92	35度 44分 8~ 9秒	137度 58分 55秒~ 59分	19960910 ~ 19961002	330㎡	
調査原因	道路改良工事に伴う事前調査						
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
狐久保遺跡	弥生時代 後期	竪穴住居址 2軒	弥生土器(後期) 打製石包丁 砥石 紡錘車(石製・土製) 打製石斧		一軒の住居址は一辺 8m弱の大型で、内 部周囲に小ピットを 持つ		

狐久保遺跡(第3次発掘調査)

—緊急発掘調査報告書—

平成9年3月20日 発行

編 集 狐久保遺跡発掘調査団
発 行 駒ヶ根市
駒ヶ根市教育委員会
印 刷 駒ヶ根市赤穂4295
徳宮沢印刷

